



福田恒存集

江苏工业学院图书馆
藏书章

第三卷

福田恆存全集 第三卷

昭和六十二年六月二十五日第一刷發行

定價五千五百圓

著者 福田恆存

發行者 西永達夫

發行所 株式會社 文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三ノ二十三
郵便番號一〇二

電話東京(〇三)三五—三三(大代表)

印刷所 精興社

製本所 加藤製本

製函所 加藤製函

©TSUNEYARI FUKUDA 1987

萬一、落丁、亂丁の場合はお取替いたします

ISBN 4-16-363370-7

Printed in Japan

目次

I

平和論にたいする疑問

平和論と民衆の心理

ふたたび平和論者に送る

戦争と平和と

個人と社會

II

漢字恐怖症を排す

國語問題と國民の熱意

「國語改良論」に再考をうながす

13 27 30 52 65 83 90 97

再び「國語改良論」に猛省をうながす
金田一老のかなづかひ論を憐れむ

129 112

III

日本および日本人

161

文化とはなにか

207

文化の博物館化

225

指定席の自由

228

民衆の生きかた

237

自己抹殺病といふこと

255

俗物論

264

IV

戀愛の幻滅

現代狐物語

性的好奇心について

現代人は愛しうるか

愛の混亂

戀愛と人生

V

旅情

ギリシアの金

378 373

320 314 303 297 291 279

| | |
|--------------|-----|
| 喧嘩を吹つかけられた話 | 380 |
| 高所恐怖症 | 402 |
| 味は二の次 | 404 |
| アメリカの米の飯 | 407 |
| あなたまかせのカメラマン | 411 |
| ニュー・ヨークの焼豆腐 | 416 |
| ニュー・ヨークの魚料理 | 421 |
| 悪魔 | 424 |
| 慾望といふ町名 | 426 |
| アメリカの貧しさ | 429 |
| ステュアデスの微笑 | 432 |
| イギリスの茶 | 436 |
| ピカデリーのスコッツ | 441 |

牛肉の品さだめ

日本の金

一つ下のでございます

ホーム・グラウンドの味

西洋料理のメニュー

アメリカの自然と生活

エリオット會見記

フィリップス・コレクションへの招待

牛に牽かれて

*

怖いニュース解説

私は真相を知りたい

比喩的俗語の濫用

輿論を強ひる新聞

新聞と運動神經

素顔のないもののみが風潮を作る

氷山の頭だけの報道

VI

人間・この劇的なるもの

覺書 三

500

508

511

514

519

595

福田恆存全集 第三卷

裝釘 柴永文夫
題簽 田中眞洲

I

平和論にたいする疑問

——どう覺悟をきめたらいいか

まへまへから言ひたいとおもつてゐたことについて書きます。

一 「文化人」といふもの

まづ、このやうなことをどう定義したらいいか。

まへに「婦人公論」にも書いたことがあります（指定席の自由」本巻二百二十八頁以下）、私はこんな經驗をしました。數年前「文藝春秋」主催の文藝講演會で九州へいつたときのことです。板付の飛行場に降りて、飛行場と福岡との間を往き來するバスに乗りこまうとした瞬間、新聞社のひとが來て、「福田さんですか？　ひとつ新鮮なところで九州の印象をきかせてください」といふ。私は茫然としてその人の顔を眺めました。九州もへつたくれもあつたものではない。私にはまだ九州なんてものは見えてゐません。

眼のまへにあるのは飛行場だけです。羽田と板付との差がわかるほど、飛行場にたいする私の眼は肥えてをりません。第一、私に飛行場の趣味なんかありはしない。

しかし、この新聞記者の性急さは問はないことにしませう。問題なのは、板付に著いたばかりにせよ、あるいは九州全土を一週間旅行したあとにせよ、なにゆゑ私に九州の印象などきかうとするのか、きいてどうしようといふ魂膽なのかといふことであります。それが出來ごころでない證據に、文藝春秋新社の九州講演はその後もたびたびおこなはれてゐて、つい最近それに加はつた講師のひとりから、おなじ經驗をきかされました。まだやつてゐるのです。これはなにも文藝講演會にかぎりますまい。また九州だけにかぎりますまい。日本中いたるところで、何十年もまへからおこなはれてきたことであり、また今後も何十年とつづく習慣でありませう。

ところで、「文化人」とは、かういふばあひに意見をきかれる資格ありと見なされてゐる人種であり、また當の本人もいつのまにか何事につけてもつねに意見を用意してゐて、問はれるままに、ときには問はれぬうちに、うかうかといひ氣になつてそれを口にする人種である——かう定義していいやうにおもひます。

すこし生眞面目になつていふと、自分の土地のかたぎ、風俗などについて、東京からやつてきた「文化人」の印象をきかずにゐられないほど自信がないのかといひたくなります。なぜ逆に、私たちにその土地の事情について教へてやらうと努めないものでせうか。かういふ反問は少とおとなげないかも知れない。じつさいは、かれらは私たちからなるにも教はらうなどとしてはゐないのです。ただ「文化人」の意見は新聞記事になると考へてゐるだけでせう。しかし、それが記事になるといふ考へがいつのまにかできあがつてしまつたのは、もとをただと「文化人」が自分たちについて自分たちよりもよく知つてゐるといふ妙な劣等感があつたからにちがひない。これは困つたことです。

私がアメリカのインテリ青年と話してゐたときのことです。かれがしきりにアメリカにおけるインテリの孤獨について語るのをかしくなり、私は「きみの話をきいてゐると、日本のインテリ青年と話してゐるやうな錯覺を感じる。きみのいふ孤獨は世界中どここのインテリにも共通な現象ぢ

やないか？」とまぜかへしました。すると、その青年はまるでまへから用意してゐたやうに、勢ひこんでかう答へたものです。「いや、日本のインテリとはちがふ。日本のインテリは明治のレストレイション以來、西洋文明の紹介者として、いつも國民のリーダーになつてきた。インテリの役割といふものがちやんとある。だから國民から、自分たちより上にある存在として尊敬されてゐる。ところが、アメリカのインテリは大衆の眼から見れば、無力で生産的な邪魔ものなのだ。」

私はおもはず吹きだしてしまひ、「日本のインテリもそつくりそのままのことをいつてゐる。前世紀末のロシアの小説から『餘計者』といふことばを見つけてきて、自分たちに適用してゐるものもゐるくらゐだ」と、さうはいつたものの、なるほど彼の言にも一理はあるとおもひなほしました。アメリカでは、まさか西洋文明紹介の看板で一生食ひつなぐなんて藝當はできません。早い話が、日本ではいまだに、外國へいつてくると「ヨーロッパ紀行」「アメリカ紀行」などといふ本を書いて、一二月月の生活費を捻出することができますが、アメリカではさうはいかない。ヨーロッパでなにか異常な冒険でもしてこないかぎり、まづ「ヨーロッパ紀行」なんて本をだしてくれる出版社は見つからないでせう。それが日本では可能なのです。だから「文化人」といふものが氾濫し、龐大な「文化人名簿」が